Japanese Association for Religious Studies

キリスト教受容と伝統思想
――武士道をめぐって――

代表者　狭間芳樹
コメンテータ　浅野淳博
司会　岩野祐介

キリシタンと武士道

狭間芳樹

日本におけるキリスト教受容の問題が論じられる際、とりわけ明治期には新渡戸稲造の *Bushido* が念頭に置かれ、伝統思想と位置づけられた武士道がその思想的背景にあるとの見方がなされてきた。さらにこうした捉え方は、明治期のみならず近世のキリシタン信仰にもあてはめられることがあり、そこでの論調は、信徒たちの殉教精神が武士道精神の上に培われたというものである。キリシタン研究において殉教動機の解明というのはかねてからの難題であるが、海老沢有道氏らの先行研究にも窺える見方、すなわち伝統思想がその涵養に機能したとの見方は、そうした解明の糸口として適切なのであろうか。また、そもそも武士道を伝統思想と位置づけることができるのか。さらには武士道とは何を意味するものであるのかといったこともあわせて今一度検証されねばならないように思われる。

武士道概念が形成される経緯を歴史的に振り返ってみると、それは武士が王朝貴族の生き方に対して彼ら独自の生き方を自覚するところに端を発する。そしてその後歴史的変遷をたどり、武士たちにとって死が日常的なものでなくなりゆく近世社会においては、山鹿素行らによる儒学と結びつくかたちで、いわば広義の武士道とでも言うべく「士道」が登場する。一方、士道に対し依然として「死の潔さ」などを重視し続ける立場として、武士道書に代表される狭義の武士道が生みだされ、さらにその後、矜持の基盤が異なる両者の要素をそれぞれ部分的に抽出・統合し、新しい時代に相応しいかたちへと再編されたのが明治期の武士道である。新渡戸が説く「高い身分に伴う義務（ノブレス・オブリージュ）」とは、西欧における社会のあるべき姿、道徳観であるが、彼は広義の武士道と狭義の武士道とを統合させ、明治における「国民的武士道」とでも呼ぶべき道徳観、日本におけるノブレス・オブリージュの措定を試みたのであった。

ところで新渡戸は *Bushido* 第三章（「廉直すなわち義」）において、「義」の重要性を説くと同時に、「義」と「義理」とがまったく違うものであることを強調している。現代のわれわれが「武士の忠義」という言葉を聞いて思い浮かべるイメージの一つである赤穂浪士、四十七人の義士について、新渡戸はそこでの「義」が決してキリスト教的な義ではなく、あくまで義理に過ぎないと断じ、義士たちの行動を論う。さらに第十二章（「自殺と敵討ちの制度」）で、死を急いだり、望んだりすることを「卑怯」であると述べていることからは、新渡戸が殉死を、「義」と捉えていなかったことがはっきりと窺える。したがってそこでの議論から義士、武士たちの殉死とキリシタンた

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

ちの殉教との相違を峻別する新渡戸の論理を読みとることができようし、またそれゆえ海老沢氏らの見解というのは、彼の主張を的確に捉えたものではないと評せざるをえないのである。

新渡戸が言う武士道、換言すれば、近世以来の伝統思想として位置づけられた武士の道徳というものは、むしろ武士に求められていた徳目を、武士を越え、平民や商人へも拡げ、適合させる「平民道」へ向かうことを企図するものであったはずである。このことに留意するならば、平民道の構想というのは、いわば伝統思想としての武士道を止揚することであったと考えられるし、彼が武士道を「旧約」として捉え、キリスト教との出会いを契機に、新たなる倫理、道徳へと進化を遂げねばならないとの論を展開したところにこそ、キリシタン信仰の深化や殉教の背景があると考えるべきなのである。

韓国の伝統思想とキリスト教

方　俊植

二〇〇五年度に行われた韓国の「人口総調査統計」によると、おおよそ人口の二五％の人たちが、自らをキリスト教徒であると明確に表明している。韓国においてこれほどまでにキリスト教徒が増加した理由としては、韓国のキリスト教がナショナリズムと接合したからだとの見方が一般的である。またこのことは、韓国ではキリスト教が帝国主義や植民地主義としてではなく、当時の人々によって「積極的に受け容れられた」ことを意味するものだとの指摘もある。では、こうした背景のなか、韓国の伝統思想とキリスト教との相関関係は如何なるものであったのか。

まず、朝鮮王朝時代（一三九二―一九一〇）、仏教の衰退とともに新たな政治理念として登場した儒教は、十七世紀に入ると、現実とは乖離した国家理念として国家の機能を弱体化させ、社会全体を混沌へと陥らせることとなった。その結果、一部の「両班」―朝鮮の支配層―から、「現実の改革をもたらすべく新たな理念」を求める動きがうまれた。つまり、朝鮮へのキリスト教（カトリック）の流入というのは、当初、海外の宣教師によってではなく、現実の改革を求める両班層によってなされたのである。こうした動きのなかで特に注目すべきは、カトリック教会の設立に先駆的な役割を果たした李檗（一七五四―一七八六）という人物である。李檗は儒教の知識を用いて支配層のための『聖教要旨』を著した。全体が四十九章から成るその内容を確認してみると、まず一章から十五章までのところでは聖書の内容が説かれ、次の十六章から三十章で儒教経典の知識について説明されている。そして三十一章から四十九章では、自然を通して「ハナニム」（＝創造主・神）の属性と業績とを称え、懺悔と救済の道を提示し、理想的なハナニムの国が古代東洋の聖人や聖君の治世のようなものであったことが論じられている。では、李檗は『聖教要旨』において、儒教思想と聖書とを、どのように結びつけているのであろうか。以下は『聖教要旨』（一章）の一部である。

NII-Electronic Library Service